

北の海の海岸で

遊佐町近くの海岸
西陽の下にたたずみ
逆光のカメラの向こう
家族の黒いシルエット

二十人ほどの人たちが
思い思いにテント張って
砂浜 彩るサンダル
ほらあちらこちらに

足首まで濡らす女性たちのそばに
水中眼鏡をつけ潜る子供たち
その傍ら水中網を持って
動き回る小さい我が子がいた

鳥海からつながる
水が湧き出る海岸
砂浜に輪を描いて
海につながる

膝まで浸かってモバイル越しに見えた
フグの子供がまるでメダカのように
すくってみるとヒレを回しながら
四角い頭に小さい口が可愛い

遊佐町近くの海岸
西陽の下にたたずみ
逆光のカメラの向こう
家族の黒いシルエット

高く嵩上げされた
ほとんど通らない線路と
道路の下に広がる
少しだけの砂浜

うちよせる波

手に持ったサンダル
鼻緒で痛くなり

陽がかげった海岸
ネイビーのラッシュガード

よせては返す波の音聞きながら
昔の歌口ずさみ足元濡らして

踏みしめた砂が
波に溶けてなくなる

その瞬間の刺激
心地よいマッサージ

思い出す歌のなか
情景がよみがえる

砂に書いた文字が
消えること歌ってた

明日は離れ離れになるさみしさ
その気持ち共感できるこのシチュエーション

時折ふく風が
波ですずしくなる

その瞬間の癒し
疲れも忘れて

水に流して

誰にも迷惑かけずに
ここまできたはずなのに
かえってほとんど
かまわれなかったことがさみしい

素直に甘えていたなら
もっと楽なはずだった
小利口 才走り 拳句の果てには生意気

そんなつもりでは なかったことを
繰り返されて はじめて気がつく

できることなら 水に流して
これまでの全て やり直したい

本当はもっと気楽に
やればよかったかもしれない
大切なものは
何だったのかわからなかった

流れを今止めるのは
難しいことに気がつく
独断 偏見 拳句の果てにはひとりぼっち

こんなはずでは なかったことを
言い渡されて はじめて気がつく

できることなら 水に流して
これまでの全て やり直したい

雨だれの音

いま夏本番迎えたとき
かいた汗を流した後
眠るベッドの脇の窓の向こう
聞こえてくる雨だれの音

降り出したばかりのホワイトノイズ
心地よい周波数で聞こえてくる
全てのことを
洗い流すように

今日の体の疲れを癒すだけでなく
どこか心も落ち着いてくるようだ
そして優しく包み込んでくれるような
幼い頃 母に抱かれるように

この蒸し暑い夏 不快指数
ピークになった矢先の夜
それがはじけるように天の恵
したたり落ちる雨だれの音

降る雨の音にあると言われている
心地よい周波数が感じられる
全てのことが
生き返るように

知らないうちに何かと溜まってくストレス
夜中に目覚めることも多くある中で
そして今日は朝までスッキリ休めるような
幼い頃 ゆりかごに包まれるように

今日の体の疲れを癒すだけでなく
どこか心も落ち着いてくるようだ
そして優しく包み込んでくれるような
幼い頃 母に抱かれるように

あの頃の歌

古びた街の片隅
木製ガラス引き戸が
暗く閉め切ったままの
駄菓子屋が見える

十円玉握り締め
通った店思い出す
店の中にもった
関東炊きの香り

誰もいない土の道
歌った歌思い出す

いつも夏の高原
訪れるたび思い出す
色を忘れた裏山
探検したこと

竹竿付け足した
長いあみをひそめて
鳴き終わるまでの蝉を
下から見上げていた

誰もいない山の道
砂だらけの膝小僧

テレパシー

まるで時雨のように聞こえる蝉の声
ここぞばかりとわざと目をつぶり
もしかしたらテレパシー伝わるかもしれない
頭に描いて集中して念じてみる

目の前広がる空の下のお花畑
まさに物語のような景色を君にも

山の麓に咲くラベンダー畑
ここぞばかりとわざと目をつぶり
もしかしたらテレパシー伝わるかもしれない
心に刻んで集中して念じてみる

時折ほんのり漂う心落ち着く香り
見える風景と共に送ろう君にも

目の前広がる空の下のお花畑
まさに物語のような景色を君にも

オーソドックス

時代を超えても残るもの目指し
飾りの少ない本質求めて

言いたいこと全て言わないで
一言で笑顔になれるような
何度でも繰り返しながら
つぶやけることのような

アピールひとつしなくても
必要とされるようでありたい
シンプルな輝き求めて
それでいてありふれたものになりたい

世代が違って共感できること
同じ感情見つけてゆきたい

難しいこと多くを言わないで
一言で勇気づけられるような
さりげない普通の仕草で
背中押すことのできるような

押し付けることしないで
必要とされるようでありたい
シンプルな存在求めて
それでいておしゃれなものになりたい